

ステンレス鋼

小倉 一純

ニクロム線。昭和のころ、单身生活を送ったことのある人ならば知っていると思う。ニッケルとクロムと鉄の合金線である。

電熱器を引き合いに出すと分かりがよいだろうか。一人用の小さなアルミ鍋で、インスタントラーメンを煮る時に使うアレである。その発熱部分の、コイル状にカールした金属の細かい線が、ニクロム線だ。発熱すると真っ赤になる。大正十五年に設立されたわが社の前身は、これをつくっていた。

やがて会社は、ニクロム線づくりを応用し、同じ原料のステンレス鋼板をつくるようになった。台所の流し台などにも使われている金属の板である。それが時流に乗って発展し、神奈川県相模原に二十万㎡の用地を得て建物を建設し、そこが主力工場となっていた。

時が流れて昭和五十九年、どういう巡り合わせか、そこへ配属されてきた頼りない学卒の新社員が、私であった。経理課に席をお

き、仕事は原価計算である。

理系の同期、佐々木は、製造部門の冷延工れいえん場に配属となっていた。冷延というのは、まだ厚みのある大きなコイル状のステンレスを、金属ロールで両側から挟んで延ばし、薄くするのが仕事である。その最終工程に「検査」というのがあった。

延ばされたステンレスはそれなりのスピードで流れて来るのであるが、その表面の傷などを目で見てチェックするのが、「検査」の仕事である。流れてきたステンレス鋼板の両サイドは、いってみればブツ切りである。切れ味の悪い刃物のようなものだ。その部分に恐る恐る指で触れると、ブツブツザラザラとしている。これをバリといった。佐々木の先輩である渡辺は、この「検査」の係員だった。

ある時、彼はふとしたことから、右手の甲でこのバリに触れてしまった。むろん軍手はしている。だが、鈍い刃物状のバリはそれなりのスピードで流れているのである。彼の指

は、親指を残してすべて切断された。軍手もろとも切れて床に落ち、辺りは血に染まった。

女子社員が出してくれる麦茶が嬉しい季節となっていた。冷延工場の事務所の軒先にぶら下がった、ガラスの風鈴の音色が、耳に涼しい。

佐々木と渡辺は、事務所の会議用デスクに腰を下ろしていた。經理の私の話を聞くためだ。立てた予算に対してどれだけの経費で生産ができたのか、会社の利益とも直接つながる重要な報告である。管理職も同席の会議で、毎月行われていた。

けがで現場の仕事ができなくなった渡辺は、事務所に配置転換になっていたのである。

彼は地方の高校の卒業である。彼のように現場から事務所へ配置転換になることを、会社では「事務所へ上^あがる」と言っていた。鉄鋼というのは古い体質で、ブルーカラーとホワイトカラーにはハッキリとした棲み分けが

あった。彼のように事務所へ上がることは、出世には違いなかった。

あの事故の後、渡辺が手の緊急手術を受けてから四か月が過ぎていた。白い包帯を巻いた右手で器用に煙草を吸っている。彼は右利きである。だが、流石にペンを持つことはできず、左手で苦勞しながらメモを取っていた。

その晩、私は、スナツクのカウンターに、この二人と並んで腰をかけていた。会社からもそう遠くない、駅裏の小さな店である。

無理して笑顔をつくった渡辺が、口火を切っていった。

「事故でさあ、百万単位の金もらって、ホンダのスポーツセダンを現金で買ったよ。残りは貯金した。事務所にも上がったしさっ」
「そうですか。ホンダのあれっ、買ったんですか。すごいじゃないですか！」

私は合いの手を入れた。

それからしばらくは車の話になった。それ

も途切れ勝ちになったころ、

「俺、本当は、結婚の約束してたんだ。でも、彼女にこの手見せたら——、ゴメンっていわれたよ……」

渡辺の結婚がダメになっていたのである。彼は、カウンターの黒い天板に右手を載せ、包帯をはずして見せた。その部分は全体に赤く浮腫むくんでいる。そして、体毛が醜みにくくまだらに残っていた。

彼は表情も変えなかった。泣いたってどうにもならないことを、本人が一番よく知っていたからである。

「これじゃあ、出世して車買っても、ちっとも嬉しくないよなあ」

ポツリといった。誰も返事ができなかった。

そろそろ終電の時刻が迫ってきて、我われは席を立った。

まだく、若く見えるロングヘアのママが、愛想のよい笑顔をこちらへ向けて、スナック

の電話番号の入ったマツチを三つよこした。

「またどうぞ！」

ハスキーな声に送られて、我われは薄暗い路地へ出た。

一瞬、ムツと、蒸し暑い真夏の外気が我われを襲った。横浜線沿線の独身寮で暮らす私と佐々木は、先輩を見送ってから、JR橋本駅へ急ぎ足で向かった。

「なあ、小倉、さっきはいえなかったけど——」

真顔の佐々木が、ちらっとこちらを見ていった。

「どうした、なんのことだい？」

「実はなあ、オレ、渡辺先輩の婚約者につき合ってるんだよ。病院に先輩を見舞った時、そこで初めて彼女と会って、それで……」

驚いた私は、二の句が継げなかった。

渡辺の婚約者は宮崎真弓という。来年三十になる彼より六つ年下である。短大を卒業して地元の幼稚園の教諭をしている。美人では

ないが愛らしい女性だ。彼とは、会社のある地元商店会が主催する、若い男女のための食事会で知り合った。渡辺も真弓も車が好きで、会が終わるころには、お互いに打ち解け合っていた。

出会ってから三か月も経つと、二人は毎週のように、渡辺の車でドライブに出かけていた。車は中古だったが、手入れが行き届いている。

さらに半年近くが過ぎたころ、近くの津久井湖へ出かけていた二人は、車から荷物を下ろし、キャンプ場のバンガローに泊まった。周辺の桜は満開である。北から冷たい空気が入り込み、花冷えの夜だった。

彼は寒がりの真弓を、後ろから抱いたまま横になった。

「俺の奥さんになってくれるかい？」

耳元へそつと彼が囁いた。彼女は声を出さずにうんと頷いた。彼らは身動きもせず、そのまま湖畔の朝を迎えた。二人は幸福の絶頂

にいた。

渡辺が大けがをして、病院の救命センターに運ばれたという報せを受けたのは、その翌日の月曜日である。ちょうど午後、園児の昼寝の時間帯だった。一日中忙しい彼女が、ほっと一息ついていた時である。彼は、会社へ提出した緊急連絡先カードの一番はじめに、彼女の名前を書いていたのである。

彼女は同僚に断りを入れて、急ぎ足で幼稚園を出た。病院まではバスで二十分ほどの距離である。国道十六号線の渋滞が、彼女の気持ち^{はば}を阻んでいた。バスは結局十分遅れで目的地へ到着した。その病院で真弓は、彼は体の一部を切断する大けがだと聞かされた。彼女の下顎^{したあご}はがくがくと震え出し、歯の根が合わなくなっていた。

手術が済んで一か月が経ったころ、彼女は病室にいた。彼のベッドの脇でパイプ椅子に腰を下ろしていたのである。すると彼は何を思ったのか左手で、右手に巻かれた包帯をは

ずし始めた。やがて、その彼の醜い傷痕が、
いやが応でも彼女の目に映る。次の瞬間、若
い彼女は思わず「私には無理」と口に出して
いってしまった。同時に、無慈悲な自分自身
への失望の涙が彼女の頬を伝う。彼は黙って
その様子を見ていた。濡れた顔で立ち上った
彼女は、病室の入り口のところで見舞いに
やって来た佐々木と鉢合わせになった。これ
が、佐々木と宮崎真弓の出会いである。

改札を抜けてプラットホームへ出ると、終
電の東神奈川行きが、タイミングよくすべり
込んで来た。我われは、黙ったまま横浜線の
吊革つりかわにぶら下がり、駅を出て真っ暗な車窓に
ぼんやりと目をやった。

電気炉の内部でどろどろに溶けるステンレ
ス鋼のように、われわれ三人の関係は、やが
て真っ赤に熱を帯びるのだった。

あれからもう三十年が経った。私たちの世

代はバブル景気を経験した。その波に乗って、私は二度の転職をした。だが、今はそれも早期退職をし、高齢の両親を介護する日々を、淡々と送っている。

同期の佐々木だが――、先輩の渡辺に気兼ねし、一年後に会社を辞めた。実家のある福岡へ戻り、今はそこで、母校の大学の事務方の仕事をしている。宮崎真弓は、現在は彼の妻となり、二人の大学生の息子もいる。日曜日には夫婦揃って、障がい者のためのボランティア活動に汗を流しているという。

渡辺先輩であるが……、私は彼の行方を知らない。バブル景気も終わりを告げ、会社ももっと大資本の同業に飲み込まれた時、先輩は辞表を提出し、愛車で旅に出たという。どこかで幸せに暮らしていてくれれば、と願うばかりである。

鉄鋼は危険の多い職場だった。一瞬の出来事で人生を左右されてしまったのは、渡辺だけではなかった。